ラディカル・ポリティックスの時代

——アンソニー・ギデンズのモダニティ論——

宮　本　孝　二

はじめに
1　ラディカル・ポリティックスとは何か
2　ギデンズ社会理論における位置づけ
3　モダニティとパワー
おわりに

は　じ　め　に

本稿は，現代イギリスの代表的社会学者アンソニー・ギデンズが1994年に刊行した『左右を越えて—ラディカル・ポリティックスの将来』の問題提起を受けて[1)]，マクロな現代社会論のさらなる展開を図ることを目的としている。筆者はこれまで，ギデンズ社会理論研究を継続的に行い，著作が刊行されるたびにその内容構成，ギデンズ社会理論の展開におけるその位置づけ，その問題提起を受けてさらに展開していく方向を明確化することを課題としてきたが[2)]，本稿もまたその一環をなすものである。

まず第1節で，左翼思想（社会主義）や右翼思想（保守主義）を超克した新たな社会思想としてギデンズが構想するラディカル・ポリティックスの概要を紹介し，その理論構成を明らかにする。次いで第2節で，彼の四半世紀

1) Giddens, Anthony, *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics*, Polity Press, 1994. 以下では文献表のように Giddens (1994) と表記。
2) 文末の拙稿リストを参照されたい。

にわたる社会理論の展開史の中にラディカル・ポリティックスの理論を位置づけ，その意義を明示するとともに，彼の社会理論の全体像と可能性を浮き彫りにする。そして第3節で，彼の問題提起を受けて，モダニティの特性の変化のなかで，国家や運動や諸個人のパワーがどう変化するか，について論点をまとめ，ラディカル・ポリティックスとの関連を明らかにしておきたい。

1 ラディカル・ポリティックスとは何か

『左右を超えて—ラディカル・ポリティックスの将来』は全体の内容を要約的に述べた序論に続いて，10章だての構成をとっている[3)]。最初の2つの章で保守主義と社会主義という左右両翼の思想の要点がまとめられ，第3章でそれらの思想が限界に達した原因である現代の社会変動と諸帰結が示される。そして第4章以降でラディカル・ポリティックスの基本特性，すなわち対話型民主主義，ポジティヴな福祉，環境問題に対応するライフ・ポリティックス，暴力の抑制などが検討され，最後の第10章「主体的作用と価値」で，ラディカル・ポリティックスを実践する主体的作用とその基盤となる価値観，価値判断基準の問題が論じられている。

ラディカルな思想とは，かつては資本主義体制の変革を目指す社会主義のことであったが，1980年代になるとそれは明らかに逆転し，社会主義が現状維持を指向し，資本主義の側がむしろ現状変革の動因となるに至った。すなわち保守主義といわれていた思想がラディカルな位置についたのである。それが保守革命の時代であり，社会主義諸国の解体の時代であり，福祉国家見直しの時代をもたらしたのである。そのような変化をもたらした世界的な社

3) "Introduction", Ch. 1 "Conservatism", Ch. 2 "Socialism", Ch. 3 "The Social Revolutions of our Time", Ch. 4 "Two Theories of Democratization", Ch. 5 "Contradictions of the Welfare State", Ch. 6 "Generative Politics and Positive Welfare", Ch. 7 "Positive Welfare, Poverty and Life Values", Ch. 8 "Modernity under Negative Sign: Ecological Issues and Life Politics", Ch. 9 "Political Theory and the Problem of Violence", Ch. 10 "Questions of Agency and Values".

会変動として，グローバル化，脱伝統化，反省化（反省的近代化）があげられる。

もちろん保守主義といっても多様である。ここでラディカルな思想となったものは，市場のパワーを信頼し，それを中心に据える資本主義思想である。すなわち新自由主義（ネオ・リベラリズム）とよばれるものである。この呼称についても多様な用いられ方があるので注意が必要だが，本書では新自由主義をそのような含意で使っている。ともあれ，資本主義の現状破壊力がラディカルなパワーとなったのである。

それに対して社会主義は，それを体制原理とする諸国では体制維持のイデオロギーとなってしまい，資本主義諸国では福祉国家体制を支持するイデオロギーとして作用するようになった。これが社会主義からラディカルなパワーを取り去ってしまい，むしろ現状維持を重視する保守的な思想としてしまった。

新自由主義の主張するように，市場の力だけで現代社会の問題が解決できると，ギデンズは考えない。社会主義による資本主義批判には捨て去りがたいものが含まれていたし，環境問題は市場では手に負えない問題であるし，さらには民主主義体制や暴力抑制の制度的仕組みについては，まったく別次元の問題として対応せざるをえないのである。こうして彼は，新自由主義と社会主義を超克し止揚する新たな次元の思想，ラディカル・ポリティックスを目指すことになった。

ラディカル・ポリティックスの内容については，この『左右を超えて』の第4章から第9章に至る6つの章で論じられているが，その個別の問題点の詳細については別稿にゆずり，ここではその基本特性を紹介するに止めよう。序論ではラディカル・ポリティックスの特性が，簡潔に6つにまとめられている。第1に連帯性，第2にライフ・ポリティックス，第3にジェネレイティヴ・ポリティックス，第4に対話型民主主義，第5にポジティヴな福祉，第6に暴力の抑制が挙げられる。

第1の連帯性とは，新たな社会の構想に不可欠な価値である[4]。これは本来，保守主義の掲げて来た価値観であるが，ギデンズは哲学的保守主義の示す保護・保全・連帯という価値観を，ラディカル・ポリティックスは継承し発展さすべきであると考える。ただし，それは全体性が優先され個人が抑圧されるといった連帯ではなく，自律的な個人が相互に依存しあうという一見矛盾した関係として設定される。これは家族のような小集団から，グローバルな世界社会に至るまで，あらゆる次元の社会に求められる価値なのである。

第2のライフ・ポリティックスは，ギデンズが1991年の著作『モダニティと自己アイデンティティ』で提示した構想で，これについては拙稿ですでに紹介と評価を行ったが，要するにライフ・スタイルの政治ということである[5]。ライフ・スタイルの選択，すなわち生と生活の意味づけが，政治の中心的な争点となりつつある，という指摘であった。それがラディカル・ポリティックスの構成要素として組み込まれている。意味の問い直しは現状変革につながるのである。これは特に環境問題への対応に重要である。ただし環境といっても，狭義の自然環境のみならず，身体や生殖やグローバル・システムなどもエコロジカルな課題として議論されることになる。人間が自然環境や他者（胎児やグローバルな他者も含めて）や自己・身体との関係をどう意味づけるか，ということが問われている。

第3のジェネレイティヴ・ポリティックスとは，いわば生成する政治である[6]。積極的な信頼を基盤として，自律的なパワーを人々に与え，貧困や排除の問題を解決しうるような条件をつくりだす政治が求められている。限界はあるにせよ，国家は公共領域の問題に対応せざるをえない。たとえばオネ・リベラリズムのように，福祉切り捨てのための小さな政府をいうのではなく，物的条件や組織的枠組みを提供することによって積極的に介入し，人々

4) Giddens (1994), pp. 12–4.
5) Giddens (1994), pp. 14–5.
6) Giddens (1994), pp. 15.

に自律的なパワーを生成し，そのパワーが新たな状態を生成する，そのような福祉が展望されている。これは後述するようにポジティヴな福祉，すなわち積極的で建設的な福祉とよばれるものだ。

第4の対話型民主主義は，代表型民主主義と対置される[7]。民主主義は議論の公共的な場を設定し，そこに人々を参加させるという特性をもつが，これまで参加方式は代表型に限定され，対話による議論がなされる公共的な場の形成はなおざりにされてきた。今まさに，民主主義の民主化が求められているというのである。また，それは国家の次元の制度としてのみならず，家族やその他の組織集団，ギデンズのいう自助集団や社会運動などの場でも求められ，さらにはグローバル化した場においても実現可能性をもちつつあるものなのである。なお，ミクロな場での民主化，いわば情緒の民主主義を通じて社会化されるパーソナリティが，対話型民主主義を支えるにふさわしいパーソナリティであることもまた指摘されている。

第5のポジティヴな福祉とは，第3の特性，ジェネレイティヴ・ポリティックスでも述べたように，自律的なパワーを生成するような福祉である[8]。自律性と責任を結合すること，そして第2の特性であるライフ・ポリティックス的な基準を生かすことを目指すのがポジティヴな福祉なのである。階級的妥協の産物としての福祉国家の問題点は多い。従来の福祉国家は結局のところ貧困や失業を解決できず，国家官僚制を肥大化させ，福祉依存を強めてしまった。これらに対処し，また，産出される危険やグローバルな貧困問題にも対処しうるような福祉が求められる。さらに階級モデルからジェンダー・モデルへと重心を移した福祉が求められる。福祉は連帯やライフ・スタイルや環境やグローバル・システムの問題とも密接に関連しているのである。

第6の暴力の理論について保守主義も社会主義も十分なものをもっていない[9]。保守主義は暴力の不可避性を強調し，社会主義は革命的暴力を正当化

7) Giddens (1994), pp. 15–7.
8) Giddens (1994), pp. 17–8.

する。暴力は戦争のみならず，対内的な国家暴力，ミクロな人間関係において行使される暴力，異文化間・民族間の暴力なども含まれるが，いずれにせよ暴力が行使されるのは価値観の衝突への１つの対応の仕方なのである。価値観の衝突に対応するためには，隔離したり退出したり対話したりという方策があるが，接触しかつ対話が困難なとき，暴力が顕在化しやすくなる。グローバル化した現代社会では接触は必然的であるから，隔離や退出は困難となるため，あとは対話か暴力しか残されていない。衝突するのは価値観だけでなく，利害の衝突や権力をめぐる衝突もあり，実力手段は広く分散しているという困難な現実であるが，自律性と連帯と対話とを結び合わせること，これが目標となるのである。

以上のようにラディカル・ポリティックスは，社会主義の崩壊と資本主義の高度化に対応して，新たな社会構想とそれを実現するための政治のありかたを示す社会思想である。そして，それはギデンズの社会理論に基礎づけられ，また逆に社会理論の新たな展開をはかるものである。次節では，ギデンズ社会理論におけるラディカル・ポリティックスの位置づけを明らかにし，ラディカル・ポリティックスの意義をさらに鮮明にするとともに，ギデンズ社会理論の可能性を探ることにしよう。

2　ギデンズ社会理論における位置づけ

1971年の『資本主義と近代社会理論』以来のギデンズの意欲的な著作活動は，すでに多くの単行本を産出してきているが[10]，そこにはいくつかの系列を見いだすことができる。まず，この系列を明らかにし，それぞれにおいて今回の著作『左右を超えて―ラディカル・ポリティックスの将来』を位置づけることから始めよう。

第１の系列は現代社会論であり，これは73年の『先進社会の階級構造』，

9）Giddens (1994), pp. 18-20.
10）文末のギデンズ著作リストを参照されたい。

81年の『史的唯物論の現代的批判』，85年の『国民国家と暴力』，そして90年の『モダニティの帰結』，91年の『モダニティと自己アイデンティティ』，92年の『親密性の変換』などによって展開されてきたものである。ギデンズ自身も述べているように，本書は実は『史的唯物論の現代的批判』の第2巻として刊行された85年の『国民国家と暴力』に続いて構想された第3巻『資本主義と社会主義の間』に[11]，代替する位置を占めている[12]。80年代の社会変動と，ギデンズ自身の関心の変化があいまって保留されてきたわけである。それがここ数年来のモダニティ論の成果を踏まえて，新たな構想のもとにまとめられることになった。したがって当然ながら，そこにはモダニティ論で獲得された観点，見地が継承されている。

第2の系列は，構造化理論と称されるギデンズの一般的な社会理論で，これは73年の『先進社会の階級構造』で提示された階級構造化の理論をもとに，76年の『社会学の新しい方法規準』で原型が定められた[13]。以降84年の『社会の構成』で一応の完成を見るまで，その構築が続けられた。構造化という概念は，その完成以降は著作にはあまり登場しなくなるので，第1の系列の著作との断絶と見られなくもないが，構造化理論をパワー概念を中心概念とする，社会現象分析のための前提となる枠組みとしての社会理論と把握すれば，それはギデンズの著作活動に一貫する基盤を示し，さらには，新たな社会理論の展開の可能性を開くものとして評価しうるのである。

第3の系列は，社会思想史，社会学史にかかわるものである。これは71年の最初の単行本『資本主義と近代社会理論』以来，いくつかの単行本に収録された多数の論文で扱われて来たテーマであり，95年夏に社会思想との出会いをテーマにした新著の刊行が予定されている[14]。この系列の研究は，前の

11) Giddens (1985), p. 376 に *Between Capitalism and Socalism* の近刊が予告されていた。
12) Giddens(1994), Preface.
13) 詳細は宮本(1992a)。
14) *Politics, Sociology and Social Theory: Encounters with Classical and Contemporary Social Thought*, Polity Press.

2つの系列と密接不可離に進行して来た。古典的な社会学者は，ある意味ですべて現代社会論を展開したのであったし，その前提には一般的な社会理論の可能性が存在していたのである。ギデンズもまさにそのような道を歩んでいると言えよう。

今回の著作は何よりもまず，第1のモダニティ論の系列に位置づけられよう。ただし，この系列にもいくつかの段階がある。73年の『先進社会の階級構造』の結論で述べられた，資本主義と社会主義を超克する道筋の探求の宣言に始まる長期的なもの，そして，81年の『史的唯物論の現代的批判』に始まる全3巻の著作の構想が示す中期的なもの，さらには，90年の『モダニティの帰結』に始まる近年のモダニティ論という短期的なものがある。

まず，今回の著作と最も密接に関連している短期的な系列から検討しよう。結論を先取りしていうと，近年のモダニティ論の成果が活用されていること，しかし，そこでは解明しきれなかった課題が新たに発見され解決されていることが明らかとなろう。

モダニティ論，すなわち現代社会論は，中心的なトレンドを設定し，それを多様な要因や現象などと因果的に関連づけることによって成立する。ギデンズもまたその常道に従い，まず主要なトレンドを指摘する。それは時間と空間の分離（グローバル化），離床化（脱伝統化），反省性の増大(反省化)の3つであり，それは『モダニティの帰結』で提示されて以来，一貫して諸著作で活用され，本書でも使われている。ただし表現には変化があり，カッコ内にあるのが，今回の著作で使われている表現である[15]。

これら主要トレンドとの関連で，モダニティの4つの制度的次元，すなわち産業主義，資本主義，監視，暴力のそれぞれの次元で，どのような変化が生じるのかが，『モダニティの帰結』で探求されていた[16]。各次元で生じると予想される問題点，それに対応する思想であるユートピア的現実主義の構

15) Giddens (1994), pp. 4–7, 78–90.
16) 詳細は宮本(1992 b)。

成要素とそれを担う運動の諸類型，来るべき社会システムの特性が素描されたのであり，今回の著作ではまさにこれらの論点が具体的に議論されることになったのである。

91年の『モダニティと自己アイデンティティ』については，すでに拙稿で紹介し，モダニティ論におけるその位置づけ，展開可能性を検討したのであるが[17]，それではなぜギデンズは，ライフ・ポリティックスに次いで，それを1つの構成要素とする，より高次のラディカル・ポリティックスを提示することになったのであろうか。もちろんライフ・ポリティックスでは包括しきれない問題があったからにほかならない。主として2つの問題が指摘されよう。

第1に，ライフ・スタイルの選択，生と生活の意味づけを争点として展開されるライフ・ポリティックスの指摘だけでは，いわば争点は明示できても，それを解決する方向性を示すことはできなかった。すなわちライフ・ポリティックス登場の背景としてのモダニティと自己アイデンティティとの関連は十分に論じられていたが，ライフ・ポリティックスを担う主体，主体的作用，その選択根拠となる価値判断基準には十分に答えないままであったからである。解放政治との対比で，ジェネレイティヴでなければならないという特性はすでに指摘されていたが，十分に展開されぬままに『モダニティと自己アイデンティティ』は閉じられていた[18]。しかし今回の著作で，ライフ・ポリティックスとジェネレイティヴ・ポリティックスの関連はより明確にされることになった。

第2に，第1点ともかかわるが，ライフ・ポリティックスにおいて生じる運動は，必ずしも望ましいものではなく，それには歯止めが必要となるからである。特に次節でも言及する原理主義運動がそうである。今回の著作でこれにかなり重点が置かれ検討されている[19]。ラディカル・ポリティックスは

17) 宮本(1992b)。
18) Giddens (1991), pp. 214-6.

対話的民主主義や暴力の抑制を不可欠な要素とするが，原理主義的な運動にはそれが欠落しているとされるのである。

92年の『親密性の変換』との関連はどうか。そこでは，ミクロな人間関係である親密関係における，対等なパワーをもつ自律的な人間同士の関係の新たな形成がもたらす問題点と達成点がまとめられていた[20]。いわば親密関係の民主化，情緒関係の民主化が展望されたわけだが，今回の著作でもラディカル・ポリティックスの特性の１つ，対話型民主主義の中に位置づけられ，マクロな民主化の基盤としての地位を与えられている[21]。

以上が近年のモダニティ論の系列における今回の著作の位置づけであるが，次に80年代からの中期的な系列を見てみよう。すでに『史的唯物論の現代的批判』や『国民国家と暴力』で提示された，前述の４つの制度的次元の区別という視点は，90年代からの新たなモダニティ論でも活用されてきた。すなわち産業主義，資本主義という２つの経済的次元と，監視，暴力という２つの政治的次元である[22]。今回の著作では，ラディカル・ポリティックスの課題として，環境問題への対応，貧困（絶対的，相対的）の克服，権力の恣意的行使の防止，暴力の抑制が挙げられているが[23]，明らかにこれらは４つの次元に対応したものである。４つの制度的次元の図式は，現代社会の全体像を把握するためには不可欠な枠組みであり，それを一貫して活用しつつ，それぞれの内容の検討を深めて行くという方向を，ギデンズはとっている。

また前述のように，81年の『史的唯物論の現代的批判』を第１巻とし，85年の『国民国家と暴力』を第２巻とする構想において，今回の著作が第３巻の位置を占めるのだが，予定されていた『資本主義と社会主義の間』ではなく『左右を超えて』となったのはなぜか[24]。一見同じようだが，「間」と

19) Giddens (1994), pp. 6, 9, 11–2, 19–20, 40, 84–6, 115, 124–5, 129, 132, 243–5, 251–253.
20) 詳細は宮本(1994)。
21) Giddens (1994), p. 16, 113–20.
22) 詳細は宮本(1988 a)。
23) Giddens (1994), p. 246.

「超えて」とでは折衷と超克という差がある。80年代後半から顕在化した社会主義の解体という現実が，資本主義との間という意味を失わせたからであろう。また，すでに当初から，資本主義と社会主義という単純な区分では現代社会の全体像は把握しきれない，という判断は潜在的にあったと思われる。制度的次元の枠組みにしても，それ自体がたんに経済的次元だけでは不十分だということをよく示していたのである。したがって，それらを表題にすることに違和感がより強くなったのではないか，と推測される。

資本主義と社会主義の間という問題意識は，73年の『先進社会の階級構造』の結論部ですでに出されていたが，それは経済的平等・不平等と政治的自由・不自由との関係の問題への問いであった[25]。資本主義が経済的不平等と政治的自由を示し，社会主義が経済的平等と政治的不自由を示す，という把握を前提に，資本主義のなしえた政治的合理化と，社会主義のなしえた経済的合理化とが矛盾なく存在しうる道筋を探るという方向が示されていたのである。ただし，その際に，ギデンズは現存する国家社会主義の特性というよりは，伝統的な社会主義理念としての社会主義の特性を強調し，その理念に照らして資本主義を批判し改革する立場をとっていた。今回の著作でも，社会主義の理念による資本主義批判の正当な部分を生かそうとする立場は鮮明に打ち出されている[26]。

以上のようなモダニティ論の系列における位置づけに対して，第2の系列の，一般的な社会理論としての構造化理論と今回の著作との関連はどうか。拙稿で示して来たように[27]，構造化理論の中心概念をパワーと考えれば，第1のモダニティ論の系列と統一的に理解できる。パワー概念はポリティックスの基本的構成要素であり，また，パワーは国家権力のみならず，運動や組織，さらには諸個人にも認められる。構造化理論は，そのようなパワー概念

24) 註(12)を参照されたい。
25) Giddens (1973), p. 294.
26) Giddens (1994), p. 12.
27) 宮本(1984 a)以来の拙稿でこれを示して来た。拙稿リストを参照されたい。

を基軸に構成されており，それがギデンズの著作活動の基本線をなしている。

構造化理論におけるパワー概念の中心性について，すでに拙稿で何度か強調してきたところではあるが，行論の必要上，ここでも簡潔に示しておくことにしよう。

構造化理論は階級構造化の理論が一般的な社会理論に精錬されることによって成立した[28]。階級構造化の理論については詳論は避けるが，要するに階級を構成している人々の集合的な行為，相互行為によって階級構造が再生産されるという視点であり，それに基づいて分析枠組みが設定されていた。そこですでに示されていた行為分類などに基づいて，構造化理論は一般図式として3次元構成をとることになった。意味とパワーと規範の3次元であり，それぞれの次元が行為・相互行為レベル，様相レベル，構造レベルから成る。すなわちコミュニケーション，解釈図式，有意味化という次元，パワー，手段（資源），支配化という次元，サンクション，規範，正当化という次元である。

これらの次元は相互に関連づけられて存在する。というよりギデンズ自身も明示しているように，相互関連のもとでしか成立しえない。いわば相互に媒介しあって成立している[29]。したがってどの次元に焦点を合わせても，他の次元を関連づけて把握せざるをえないのである。パワーの行使は，サンクションやコミュニケーションなしにはありえないし，その逆もまたそうなのである。

ただし理論構成からして必然的に，パワーが中心概念とならざるをえない。パワー概念が社会理論の中心概念となるのは，パワーがまず何よりも行為能力ないし行為可能性を示しているからである。ギデンズのいう変革能力である[30]。行為が形成されることによって現実は変革される。マクロな変革だけではない。日常の些細な現実もたえず小さな変革を含んで再生産される。行

28）この段落内容の詳細は宮本(1981)，(1984 a)，(1986)，(1992 a)。
29）Giddens (1984), pp. 28–34.
30）Giddens (1979), pp. 88, 91–3, 104, 235.

為は諸資源の相互媒介的動員可能性にほかならない。行為とは行為主体による手段の使用，すなわち資源の動員だからである。これがパワーの基本的な定義である。

どのような行為も，他者にとって条件となる[31]。いいかえれば行為は他者コントロールという側面をもたざるをえない。それは意図するにせよしないにせよそうなのである。そして，それが意図的な他者コントロール能力であるとき，権力と呼ぶにふさわしい。その他者の範囲によって多様な権力が成立しよう。その最大のものが国家権力である。権力がしばしば国家権力と同一視されるのは，国家権力こそが権力の最高形態だからである。この国家のパワーを基軸にして，社会を構成する諸パワーが相互にコントロールし合いながら，社会を生産し再生産しているのである。

したがって，マクロな社会理論における展開の基本方向として，国家パワーや運動，組織のパワーを中心問題としていくことになる[32]。まさに諸パワーの相互に絡み合う場としての社会イメージである。ギデンズにとってその視点が獲得でき，それが現実分析の前提として活用されれば，もはや構造化という概念を言葉として表現する必要はなくなった，と思われる。

以上のように構造化理論の系列に，ラディカル・ポリティックスを位置づけてみるならば，まさにこの方向に必然的に登場するものと言えよう。ポリティックスはたんに政治学の占有対象ではなく，社会現象の中心的次元として社会理論においても重視せざるをえないものなのである。ポリティックスとは，社会における共同意思（共同目標）の形成にかかわる相互行為の総過程にほかならず，その相互行為で行使されるのがまさにパワーだからである。構造化理論がその理論構成から必然的にパワーを中心概念とすることは，社会理論のありかたとして正しく，また，それに導かれてギデンズが今回，ラディカル・ポリティックスという課題に挑み，その具体的検討を進めている

31）この段落内容の詳細は宮本(1990 a)。
32）詳細は宮本(1988 b)

ことは，彼の理論的誠実さをよく示している。

最後に，第3の系列である社会学史，社会思想の系列における位置づけを見てみよう。今回の著作でこれまでにないものとして目を引くのは，ラディカル・ポリティックスの第1の特性として挙げられている連帯性である。そして，それが良質な保守主義の伝統に根ざす概念であると指摘されている[33]。今回の著作での，保守主義ならびに社会主義の思想的系譜の検討，両者の現在的課題についての探究などには，ギデンズのこれまでのこの系列における蓄積がよく生かされているが，特に連帯性の重視については，彼のデュルケム論に由来していると思える。

ギデンズのデュルケム論は，個別の社会学者，社会思想家についての議論としては最も蓄積の多いものである。『資本主義と近代社会理論』においてマルクス，ウェーバーと並んで1章を割き，デュルケムの著作のアンソロジーや小著ながら単行本としてデュルケム論もあり，また社会学史の中でのデュルケムの位置づけに新しい見方をもたらした論文も発表されている[34]。ギデンズは，保守主義者と目されていたデュルケムのもつ思想的，理論的な革新性を明らかにしたのであり，デュルケムの重視した連帯性の概念を，まさにラディカル・ポリティックスの第1の基本特性におくところに，明らかな一貫性を見て取れることができるだろう。

本節では，ギデンズのこれまでの著作活動を3つの系列に区分し，それぞれにおいてラディカル・ポリティックスが先端的な位置を占める根拠を示して来た。ギデンズ社会理論はまさにラディカル・ポリティックスを先端的な課題として要請し，その課題を果たすことによってさらに社会理論の充実をはかったのである。その成果を踏まえながら，次節でラディカル・ポリティックスの時代について，パワー論にかかわる重要な論点を検討することにしよう。

---

33) Giddens (1994), pp. 12–4, 124–32.

34) Giddens (1977) に収録されている論文 "Four Myths in the History of Social Thought", 1972.

3　モダニティとパワー

現代社会論という課題は社会学の一貫した中心にある。社会学史はいわば現代社会論の系譜とみなすことができる。専門分化した現代社会学はそのようなマクロな現代社会論をたんに1つの領域にしてしまった。しかし，ギデンズはそれを一貫して追究してきたのであり，90年以降はそれをモダニティ論として展開してきた。今回の著作はその先端に位置づけられるものであり，そこから現代社会論を発展させていくための重要な指針を引き出すことができる。本節ではそれをモダニティとパワーという観点からまとめてみる。

前節で述べたように，ギデンズはモダニティ論の展開と同時に，一般的な社会理論の追究も行って来た。それが構造化理論であるのだが，それは現代社会論と相互に支え合うものとして構築されてきた。マクロな現代社会論への関心と，一般的な社会理論への関心は同じ根から育っていると言えよう。筆者の観点からすれば，構造化理論の中心概念はパワーであり，パワーこそまさにポリティックスを織り成す。ポリティックスはまさに諸パワーの絡み合う場に生じるのであった。ギデンズのこれまでの諸著作とラディカル・ポリティックスの議論に基づきながら，主要なパワー，すなわち国家，運動，諸個人のパワーのあり方がモダニティにおいてどう変化するのか，そして，それはいかなる帰結をもたらすのか，について考察を進めよう。

パワー論の中心は，何と言ってもまず国家権力論であろう。それは政治学のテーマに止まるものではない。社会学，特にマクロな現代社会論や一般的社会理論は，国家論ぬきには成立しえない。国家のパワーこそ社会の立体的構成の要であり，国家のパワーなしの社会構造は，少なくとも現在のところありえない。さらに国家のパワーの特性は，社会に存在する他の諸パワーの特性をも大きく規定すると考えられる。

ラディカル・ポリティックスにおいて，中心となるのは運動のパワーなのであって，国家のパワーはたんにその敵対者にすぎないと思われるかもしれ

ない。しかし，ギデンズにとってラディカル・ポリティックスの担い手は特定の主体に限定されることはない。強調されるのはラディカル・ポリティックスを担う主体的作用というとらえ方であり，その作用の担い手である主体は決して特定なものに限定されていない[35]。したがって国家のパワーもまたそのような主体でありうるのである。

ギデンズは保守主義がラディカル化したこと，それが保守主義の1つの系譜である市場主義，すなわち自由資本主義であることを指摘するのだが，そこから次のように議論を展開することができよう。資本主義社会において，国家のパワーは従来，保守主義に立脚していた。これは資本主義社会の国家のパワーが，単純に資本主義イデオロギーを基本的な意思内容としているのではないことを示唆している。純粋な資本主義体制などは存在したためしがなかったのだし，したがって国家パワーも複合的な性格をもたざるをえない[36]。

すなわち国家のパワーは経済的パワーとしては，資本主義や産業主義を推進する立場であるが，政治的，特にイデオロギーと監視と暴力の次元では，個別社会でそれぞれに特有な前近代からの遺産を継承していた。ナショナリズムなどの伝統的な信念，社会全体を監視しコントロールしようとする意思，対外的および対内的に対立を暴力で処理しようとする意思などが，経済的パワーと複合していたのであり，今日でもまだ多くの国家ではそうなのである。資本主義的な意思といっても多様であり，そればかりか，それらの意思を担う主体は国家の一部にすぎず，社会主義に対抗する保守主義はもちろん，自由資本主義とも相いれない前近代的なイデオロギーや，軍事力による国家パワーの充実を重視する勢力なども併存した，統合はされてはいるが，必ずしも一枚岩ではない構成をもっているのである。

しかし，グローバル化が進行する中で，先進的な産業社会では，その国家

35) Giddens (1994), pp. 20–1, 250–1.
36) 国家の2つのパワーについては宮本(1988 a)

のパワーは立脚するイデオロギーを無化する方向にあるといってよいだろう。これを産業主義への純化といってもよい。もちろん，資本主義を捨て去るわけでもなければ，監視的，管理的な意思や，軍事力，警察力を行使する意思，すなわち秩序維持の意思を消去してしまうわけではない。ただそれらの意思から，前近代性や伝統的イデオロギー的色彩が消えて行くということなのである。すなわち，国家パワーの意思内容は産業主義に純化していくということ，同時にまた，環境問題はもとより，監視や暴力の次元への対応も迫られているということ，これがモダニティの先端において国家パワーが被る変容と言えよう。

この変容によって国家のパワーは，まず産業化の推進という経済的な課題を中心問題とするようになる。しかし，選択肢は多様であり，資本主義の大枠の中で特定の政策が選択される。たとえば80年代のイギリスでは，サッチャー政権が市場主義，自由資本主義を推進した。福祉国家体制，経済介入国家体制を変革し，経済運営の主流を市場に移す政策を採用したのであった。こうして保守主義がラディカル化し，社会主義はむしろ福祉国家体制を保守する側に回ってしまった。しかし，ギデンズはそのような国家のパワーでは，貧困や環境の問題はもちろん，権力の恣意的行使や暴力行使の問題は克服できないとする。だからこそ新たなラディカル・ポリティックスが求められたのである。

先進的な産業社会では，国家のパワーの意思内容を基本的に規定していた旧来のイデオロギーはその威力を失い，国家のパワーは経済運営の実効性と，社会秩序維持，統合維持の実効性を問われるようになる。その際に頼るべきイデオロギーはないと言ってよい。旧来のイデオロギーは，国家のパワーの実効性はともあれ，国家のパワーに正当性を付与してくれていたのだが，もはやそれは困難となった。しかし，このことは国家のパワーが低下してきたことを意味しない。国家のパワーは相対的に強大である。ただ，パワーが担う課題が過重になってきたのであり，正当化イデオロギーという踏み台が外

されてしまったというわけなのである。また，対話型民主主義や暴力抑制が加速されることになる。

社会主義社会ではどうか。周知のように，社会主義社会の国家のパワーはすでにその多くが解体した。その原因は，経済的な課題に対応できなかったことにほかならないが，政治的のみならず経済的，社会的，文化的な人々のパワーを抑圧し，可能性を圧迫し押さえこんだこと，しかもその際に恣意的な暴力公使が横行したこと，などが挙げられよう。経済運営の無能さばかりでなく，多様性や異論，異議申し立てを許容できない秩序維持，統合維持の方針がもはや成立しがたくなったのである。

もちろん，経済的課題に応えられなかったことが致命的であった。グローバル化の中で国家パワーは経済的課題を中心的とせざるをえなくなった。そのようなトレンドは，国家パワーの産業主義への純化と同一である。社会主義国家パワーは，産業化の課題に，資本主義を否定した方策で応えようとしたのだが，それに失敗したばかりでなく，先進的な資本主義国家が福祉国家として達成した諸課題にも，きわめて不十分にしか応えられなかったのである。そして，経済的な課題に応えることができなかったため，社会主義イデオロギーは社会統合力を低下させ，資本主義や自由主義はもちろんのこと，民族主義のパワーが社会変動を担うことになった。国家パワーは資本主義や自由主義が強化される段階にはなく，諸パワーの寄り合い所帯の様相を呈している。しかも，そこには強大な軍事力の問題も残されている。

そのような国家パワーの複合的性格は，経済的パワーに政治的パワーが複雑に絡みついていることから生じる。国家主義や恣意的な暴力行使といった前近代の遺産を政治的パワーは引きずらざるをえなかった。いわゆる資本主義社会と同様に，社会主義社会とはいっても，国家パワーは社会主義に純化していたわけではなく，歴史的に累積した前近代的，伝統的なイデオロギーをも抱え込み，それらのイデオロギーを担う諸主体も，国家パワーの中枢を支える構成要素であった。それはまだ残存し，旧社会主義社会の変動方向を

なおも不安定なものとしているのである。

どのような体制的特徴を示す社会であれ，現代社会において国家パワーは相変わらず相対的には強力だが，その地位は低下しつつある。運動や市民のパワーが向上したからだけではない。前述のように，国家パワーが処理できないほどに問題が拡大してしまったのだ。冷戦構造は，左右対立を根本問題として提示して，現実の諸問題を相対的に小さなものとしてきた。しかし新たな世界変動が多くの問題を顕在化させたのである。モダニティにおいて，ラディカル・ポリティックスを担う主体を増大せざるをえない。こうして，多種多様な運動が噴出する。

運動のパワーはモダニティにおいてどのような特性をもつに至ったか。ギデンズが指摘するように，その主要なものはライフ・ポリティックスである。ライフ・ポリティックスが優勢になった背景をなすモダニティの特性については，すでに拙稿でまとめたところであるのでここでは繰り返さず[37]，ライフ・ポリティックスを構成するが望ましくない運動，特に原理主義的な運動についてのみ触れておこう。

原理主義的な運動は，生や生活の意味の回復を伝統に，ときには創造された伝統に求める[38]。多くは宗教的であり，イデオロギー的である。宗教はたとえ新しい宗教とよばれるものであっても，それが宗教であるがゆえに原理主義的であらざるをえない。それは伝統的宗教の焼き直しであるほかはなく，またイデオロギーであるほかはない。反省を知らない知識や思想をイデオロギーというべきであろう。まさにそのようなものであるからこそ強固な信念，正義を独占しているという信念が生まれ，暴力行使も辞さないラディカルな運動が実践されるのである。

たんに宗教にのみならず，民族主義やナショナリズムもまた原理主義的な運動のイデオロギーとなる。また，いかなる思想的立場も対話を拒否し，反

37）宮本(1992)。
38）註(18)を参照されたい。

省的な作用を自らに適用することを拒否するならば，簡単に原理主義的なレベルに転化するであろう。自己アイデンティティの確保を可能にする原理主義的な運動は，たしかにライフ・ポリティックスの担い手ではありえようが，暴力の使用，対話の拒否という重要な点でラディカル・ポリティックスの担い手とは到底言えないのである。

原理主義的な運動が発生しやすいのは，国家のパワーが産業主義に傾斜するときであろう。国家のパワーもまた強烈にイデオロギー的でありながらも，産業化を推進せざるをえず，その過程で産業主義による伝統の破壊が起こる場合や，産業化がうまく進行せず富の偏在と貧困の拡大が生じるという場合にはもちろん，産業化が高度に進行して国家のパワーが急速にイデオロギー的色彩を脱色する場合にも，それに対応して，原理主義的な運動が発生する可能性が高い。前者では伝統の復活を目指し，後者では伝統の創造を目指す。ただし，前者では社会的な広がりをもつ運動でありうるが，後者では少数者の運動にとどまり，たんなる反社会集団，テロリズム集団となる可能性が高い[39]。

諸個人のパワーについてはどうか。ここで諸個人のパワーというのは，市民や大衆というように集合的に把握される，現代社会の個々人がもつパワーである。市民社会論が理想とした市民像は，民主主義を担い，自由資本主義を担う，市民的諸権利を保障され行使し得る自由で自律的な人々である[40]。そのような自律的な市民が，自律性を保ちつつ相互に依存しあう状態，これが市民社会の理想像である。自律的なパワーは，他者の自律性を侵害しない。そのようなパワーは可能なのか。ギデンズは連帯という概念を重視し，そこに自律的な個人の相互依存状態をイメージし，それを生成するものとしてジェネレイティヴ・ポリティックスやポジティヴな福祉を位置づけている。ラ

39）本稿を執筆時の1995年３月以来まさにそのような存在が，現在の日本社会にも顕在化しつつある。これについて別稿を期したい。

40）市民社会論については，庄司ほか編『リーディングス日本の社会学17：体制と変動』東京大学出版会，1988年。

デカル・ティポリィックスの目標の核心にあるのは，まさに市民社会論のそれなのである。

市民のパワーが増大してきたこと，これはモダニティが孕む否定できないトレンドである。たとえば現在の日本社会でも，政党のパワーが減少し，無党派層のパワーが強化しつつある。また，資本のパワーよりも，選択消費を行う市民のパワーが景気の動向を左右しつつある。さらには，集団主義や会社主義からの離脱，といった選択もなされ始めている。ライフ・スタイルの選択可能性が高まって来ているのであり，まさにそれがライフ・スタイルをめぐるポリティックスの基盤をなしている。

個々人のパワーについて論じるとき，個人的な関係という場も重要だ。ギデンズはすでに拙稿で示したように[41]，親密関係における民主化の分析を行っていた。相互に自律しつつ依存している，相互に自由でありつつ束縛しあっている，そのようなパラドクシカルな関係が，対等なパワー関係において実現可能性をもちつつある。これが親密関係の変換である。より具体的に言うならば，女性のパワーの増大が，女性の自律性を高め，ライフ・スタイルの選択可能性を拡大し，親密関係の在り方を変換しつつある，というわけなのである。

さらに，変換した親密関係において社会化されるパーソナリティーが，マクロな民主化を支えることになる，という重要な指摘がある。他者への配慮を欠かさない自律的なパーソナリティこそ，民主主義を実現するパワーをもつのである。パーソナリティとマクロな政治との関連は，政治学では若干の議論がなされてきたが，社会学でも重要なテーマであろう[42]。

以上，モダニティとパワーの関連，すなわち変動するモダニティの中でパワーの被る変容を，国家，運動，そして個人のパワーのそれぞれにかかわる基本的な論点について検討してきた。このような諸パワーが相互に作用し合

41）宮本(1994)。
42）社会学では権威主義的パーソナリティ研究が有名である。

いながら，ラディカル・ポリティックスを実現する方向に自他を形成していくことがモダニティの課題であり，諸パワーが共通の基盤に立ち得る客観的条件は，たとえばグローバル化によって整いつつある。もちろん，一挙に理想が実現するわけではない。そのような方向に向けて絶えず構造を生産し再生産していくことが必要なのであり，それこそ構造化なのである。

おわりに

本稿は，ギデンズの著作の検討を通じて，マクロな現代社会論および一般的な社会理論を構築するうえで直面する重要な課題を明らかにし，それに応えていく方向を明らかにすることに努めた。

現代社会論の課題は一般的な社会理論の課題と重なっている。社会学史はいわば現代社会論の累積の歴史なのであるが，それは同時に一般的な社会理論，すなわち社会と人間を全体的にどう把握するかという理論的見地の発展の歴史でもある。ここではその理論的な焦点をパワー概念に定め，それを基軸に構築される一般的な社会理論の全体像を素描し，それに対応して第3節でモダニティにおいて中心的な諸パワーがどのように変化し，いかに関連づけられるかを解明しようとしたのである。

現在，日本社会も世界も大変動期にある。秩序の組み替えが進行しており，諸パワーが絡み合いながら新しい時代の方向を模索している。その中で暴力が猛威をふるい，我々は悲惨な現実を目の当たりにしている。社会学は，社会理論は，社会思想は何をなしうるのか。こう考えるとき，ギデンズは新たな可能性を開示してくれる。ラディカルに，すなわち根本的に現状の問題点を解決するためにどうすればよいのか，という問題に彼は取り組んでいるのである。対話型民主主義，前向きの福祉，環境問題への対応，暴力の抑制，いずれをとってみても難問である。相互に関連しているこれらの諸問題に，適切で実現可能な解決の道筋をどのようにつけることができるのか，さらに議論が深められねばなるまい。

参考文献一覧

ギデンズ著作リスト（単独著作のみ，カッコ内の数字は刊行年）

Giddens (1971) *Capitalism and Modern Social Theory*, Cambridge University Press.（犬塚先訳『資本主義と近代社会理論』1974年，研究社）

Giddens (1972) *Politics and Sociology in the Thought of Max Weber*, The Macmillan Press.（岩野弘一・岩野春一訳『ウェーバーの思想における政治と社会学』1988年，未来社）

Gideens (1973) *Class Structure of Advanced Societies*, Hutchinson.（市川統洋『先進社会の階級構造』1977年，みすず書房）

Giddens (1976) *New Rules of Sociological Method*, Hutchinson.（松尾精文ほか訳『社会学の新しい方法基準』1987年，而立書房）

Giddens (1977) *Studies in Social and Political Theory*, Hutchinson.（宮島喬ほか訳『社会理論の現代像』1986年，みすず書房）

Giddens (1978) *Durkheim*, Fontana.（『デュルケム』）

Giddens (1979) *Central Problems in Social Theory*, The Macmillan Press.（友枝敏雄ほか訳『社会理論の最前線』1989年，ハーベスト社）

Giddens (1981) *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, The Macmillan Press.（『史的唯物論の現代的批判』）

Giddens (1982a) *Profiles and Critiques in Social Theory*, The Macmillan Press.（『社会理論の諸相と批判的検討』）

Giddens (1982b) *Sociology: A Brief but Critical Introduction*, The Macmillan Press.（『社会学入門』）

Giddens (1984) *Constitution of Society*, Polity Press.（『社会の構成』）

Giddens (1985) *Nation-State and Violence*, Polity Press.（『国民国家と暴力』）

Giddens (1987) *Social Theory and Modern Sociology*, Polity Press.（『社会理論と現代社会学』）

Giddens (1989) *Sociology*, Polity Press.（松尾精文ほか訳『社会学』而立書房，1992年）

Giddens (1990) *The Consequences of Modernity*, Polity Press.（松尾・小幡訳『モダニティの帰結　近代とはいかなる時代か？』）

Giddens (1991) *Moderenity and Self-Indentity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press.（『モダニティと自己アイデンティティ』）

Giddens (1992) *The Transfomation of Intimacy*, Stanford University Press.

(『親密性の変換』)
Giddens (1994) *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics*, Polity Press. (『左右を超えて』)

拙稿リスト(ギデンズ論およびそれに準じるもののみ。カッコ内の数字は刊行年)

宮本(1981)「階級理論の新展開」『大阪大学年報人間科学』第2号
宮本(1984a)「社会理論におけるパワー論の位置」『大阪大学年報人間科学』第5号。
宮本(1984b)「構造化とパワー」塩原勉編『社会学の理論Ⅱ』日本放送出版協会。
宮本(1986)「相互行為の基本類型」『桃山学院大学社会学論集』第20巻第2号。
宮本(1987)「階級分析の中心問題」『桃山学院大学社会学論集』第21巻第1号。
宮本(1988a)「国家の社会学と二つのパワー」『桃山学院大学社会学論集』第21巻第2号。
宮本(1988b)「マクロ社会理論の展開の基本方向」『桃山学院大学社会学論集』第22巻第1号。
宮本(1990a)「権力理論の基本問題」『桃山学院大学社会学論集』第24巻第1号。
宮本(1990b)「性差問題と社会学」『桃山学院大学社会学論集』第24巻第2号。
宮本(1991a)「社会学における認識論的問題」『桃山学院大学社会学論集』第25巻第1号。
宮本(1991b)「暴力の社会学」『桃山学院大学社会学論集』第25巻第2号。
宮本(1992a)「ギデンズの構造化理論」『桃山学院大学社会学論集』第26巻第1号。
宮本(1992b)「ライフ・ポリティックスの時代」『桃山学院大学社会学論集』第26巻第2号。
宮本(1994)「親密関係の社会理論」『桃山学院大学社会学論集』第28巻第1号。

The Age of Radical Politics: On Anthony Giddens' Theory of Modernity

Kouji Miyamoto

This paper aims to develop the macro-theory of modern society on the basis of *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics* published in 1994 by Anthony Giddens, who is a modern Brirish sociologist. I have tried to introduce the contents of his books, to make clear the positions in the system and devolopment of his social theory, and to find some directions in developing the social theory. The book is his latest one.

First, the contour of radical politics is introduced, and the theoretical construction is showed clearly. Radical politics is his social thought, which he regards as the new one beyond Left (socialism) and Right (conservatism).

Second, by discussing the position of radical politics in his social theory, the significance of it is searched, and the systemness and possibilitis of his social theory are investigated. When we interpret that the concept of power is central one in his social theory, we can do so most effectively.

Third, in relation to the radical politics, theoretical points at issue about the characteristics of powers are examined. The powers of states, movements, and individuals are transforming in the change of modernity.